

経営と健康

第1回

財政再建・農村復興

「報徳 一宮尊徳」

講談師 一龍斎貞花



社会保障費、平成元年12兆円が、30年には33兆円。現在の財政借金が1,100兆5,266億円。国民一人当たり890万円。返してくれといっても返してもらえません。そこで増税、取りやすく多く取れる消費税アップ。増税は借金返済かと思いきや、税収62兆円に対し予算101兆円、一年で39兆円もの赤字。日本の国大丈夫かと思いきや、政府投資銀行（旧日本開発銀行）、UR都市機構（旧住都公団）等特殊法人、独立行政法人への貸付金出資金回収。また民営化や廃止すれば

200兆円ぐらいの借金額で、先進国と比較しても多くないとか。国鉄、郵政民営化しましたが、次はどうする。民営化するとお役人は天下り出来なくなるので、関係者はしたくないでしょうね。これら新聞など発表の数字だが、公表と実際はどうなんでしょう。よく判りませんが。民間企業だったら完全に倒産でしょ。そこで登場が、財政再建の一宮尊徳です。今年映画も封切されます。

二宮尊徳の財政再建の根本は、「収入の実際を調べ、支出の限度額を決める」という分度でした。「入るを量つて出づるを制す」の徹底。収入以上の生活をするから、おかしなところから金を借りることになる。粉飾決算はいずれ破綻することになります。芸人がなにをと思われ方もありま

しょうが、税務大学校で講師、金融財政調査会、信用保証協会で講演させて頂きましたから、どうかおつき合下さい。

二宮金次郎は、232年前の天明7年（1787）7月23日、小田原栢山村の農家の長男として生れ、栢山に生家と記念館があり、母の実家は曾我で一度訪問、玄関は当時の面影を残し、写真も見せて頂きました。

4歳の時第三郎左衛門が生れ、5歳の時酒匂川の大洪水で田畑が流されてしまった。ところへ三男富次郎が生れ暮しは大変、わずかに残った田畑を手放し借金までする有様。子どもながら親の手伝いをして働くうち、14歳の時父が亡くなり貧しさから足手まといの富次郎を親戚に預けます。

「おっ母さん、いくら貧乏しても富次郎一人養えぬことはありません。私

が今以上に働きますから呼戻してください」

翌日から金次郎は暗い内から起き山へ柴刈りに。それを薪にして売り歩く。夜はわらじを作り売って歩く。

「柴刈り縄ないわらじをつくり、親の手を助け、弟を世話し、兄弟仲良く孝行つくす。手本は二宮金次郎」と、明治31年修身の教科書に紹介され、勤勉、努力、親孝行、兄弟思いの道徳的シンボルとなりました。

学問をしなければいけないと、人から貰った「大学」や「論語」の本をたきぎを背負って山道の行き帰り一心に読みながら歩く。

歩きスマホとは訳が違います。

昭和3年名古屋で博覧会が開催され、岡崎市の石材店が「二宮金次郎の石像」を出品。これが好評。しかし石像の大量生産がむづかしい。目を付け

た富山県高岡の鋳物業者が地場産業として金属製の金次郎像を大量に生産し、全国の小学校に設立されていった。

しかし戦局悪化による金属供出のため徴収され、再び石像で造られるようになり、現在の石像はその時の物が多いいと思われます。

終戦になり修身の手本だから、米軍によって撤去命令が出るに違いないと撤去した。ところが、内村鑑三先生が英語で書かれた「日本を代表する五人」の本がアメリカで読まれており、尊徳はリンカーンと共に評価されていたので撤去命令は出されませんでした。進駐軍命令によって撤去と思われていますが違います。内村鑑三はキリスト教指導者ですが、札幌農学校出身の農学博士で尊徳に学べと紹介されたのです。金次郎像といえば、薪を背負った像ですが、東京台東区根岸には苗と鍬を持った珍しい像。小田原の尊徳記念館には幼少の頃、座って本を読む姿の像があります。

16歳の時、病のため母も亡くなり、子供3人はそれぞれ親戚に引き取られ、金次郎は伯父万兵衛の家に寝泊りし、名主の家に奉公に出る。夜本を読んでいると万兵衛が、

「この世智辛い世の中、お前を養う

のにどれだけ金が掛かると思う。役に立たぬ学問などして高い油を使われてたまるか。百姓に学問は不要だ」

「これは私が悪うございました」

さればとあぜ道に菜種をまき、実を取り入れると7、8升になり、灯油に代えて本を読んでいると、

「わしの言うことも聞かずに本など読んで、そんな暇があるなら、縄をなったり、わらじを作ったらどうだ」

それではと縄をない、わらじを作り、人が寝静まつてから本を読む。

本当に勉強したい人は、どんな苦勞をしても勉強する。自由に勉強できる人に限って勉強しない。

当時放つたらかしの荒地があり、それを開墾し捨ててある苗を拾い集めて植え付け、1俵60キロ余りの米を収穫、この米を種にして増やしていき、世話になった万兵衛に何俵もの米を御礼に贈りました。「積小為大」大は小を積み重ねて為す。ちりもつもれば山となるです。

金次郎の金銭感覚

20歳の時家に戻り、荒れ放題の家を修理し、こつこつ貯めたお金で父が手

放した田畑9畝^{うぶ}10歩^ぶを、2両2歩で買戻し、その田畑を小作人に任せ、自分分は農作物や薪など売って歩く。

当時の農家はほとんど自給自足だったが、金次郎は売ってお金を得るという金銭感覚によって少しずつ田畑を買い取り増やしていき、4年後には1町4反余の地主になり更に収益を上げていったのです。

大地主となった金次郎は、26歳の時小田原藩家老服部家に、「広い世間を知りたい。給金も貰える」と中間奉公。服部家は、表高1,200石ながら、苦しい藩は半知借上げといって半分以上取り上げられ実質400石ほど。役人の給料も半分減らされていた。

1,200石の体面だけは守らなければいけないとあって、赤字は増えるばかりで200両の借金まであり、そこで全くの一文無しから二宮家を再興し大地主にまでなった金次郎の手腕を見込んで建て直しを依頼。

「総て私にお任せくださいますなら、5年間に限ってお引き受けします」

「まかせる。思うようにやってよろしい」

「それではご主人様は元より、ご家中の方々私のやり方に絶対従って頂き

ます。向う5年間は一汁一菜、木綿の着物、そして無駄なことはなさらないで下さい」

味噌、醤油から薪、灯油の使用量まで細かく定め、書き出し皆に示す。

飯炊きの下女から「お金を貸して下され」と、頼まれるや、

「返す当てのない借金はよくないよ。自分の仕事で利益を得るように努めなさい。飯を炊くのに必要な薪の数をご主人から請負い、その上で工夫して節約をしてごらん。浮いた薪の代金は私が買い取ってあげよう。節約するには鍋の底の鍋墨を削り落とすだけでも火の通りが違ってくる。薪は3本使つて鍋の底に丸く当たるように燃やせば、無駄が少ないはずだよ」

これには下女も納得。この話は後に「報徳飯」として伝えられています。

こうやれと押し付けるのではなく、なぜ節約しなければいけないのか、節約すれば自分にどれだけの利益があるのか、自分の経験から判りやすく納得させていったのです。

儉約を進めている会社が少なくありません。納得が大切です。

大胆な借金返済法は次号に。